



↑ スティーヴンさんが立ち上げたJet Witのトップページ



ブログから見える JET経験者の活躍

(財)自治体国際化協会業務部

はじめに

昨今、日本でもミクシィやグリーなどソーシャルネットワークサービス(以下、SNSという)がインターネット上で大きな勢力を誇っていますが、皆さんはどのように活用されていますか? 個人の趣味を広げたり、仕事上のネットワークを広げたりすることがあると思います。こうした経験をされた方もいるのではないのでしょうか。

今回はインターネットの世界を媒介として、JET経験者相互のネットワークを広めようという動きや、JET経験者が日本とどのように付き合っているか、ということを紹介したいと思います。

ご存知の方は少ないかと思いますが、Jet

Witというブログサイトをご存知でしょうか? 読み進める前にぜひチェックしてみてください。 <http://jetwit.com/wordpress/>

Jet Wit

このブログサイトは、スティーヴン・ホロウィッツさんが個人的に立ち上げたものです。スティーヴンさんは一九九二年から一九九四年にかけて愛知県刈谷市でALTをしていました。現在は、ニューヨーク市で弁護士として活躍されているとともに、JET A Aニューヨーク支部で重鎮的な役割を果たしています。筆者も彼とは良き友人であります。

Jet Witの内容をみてみますと、文化情報やJET A Aの活動情報などの記事が多く掲載されていますが、一番目につくのが翻訳や日系企業のアシスタント業務などの求人

情報になっています。ステイーヴンさんがこのブログを立ち上げた大きな狙いの一つとして、「多くのJET経験者達が集まって、様々な情報交換を行う場」として機能させたいということがあります。人を引きつけるブログサイトになるには、多くの人にとって有益な情報を多く載せることにあると思います。では、その有益な情報って何なの？ということになると、一番大きいのは求人情報になるのではないのでしょうか？様々なJET経験者がJet Witという共通のプラットフォームに集まり、様々な情報を提供していく。「JETプログラムを経験した」という共通の価値観を有しているのでコミュニケーションも取りやすい。こうして、Jet Witを



↑Jet Wit創設者のステイーヴンさん



↑JET A.A.ニューヨーク支部の広報誌

核にしてJET経験者のコミュニティが出来上がっていく、JETプログラムとは関係のない世界への情報発信力も高まっていくといった正のスパイラルが形成されることが期待されます。ステイーヴンさんは、このサイトを立ち上げる以前から、JET A.A.ニューヨーク支部で支部の広報誌の編集長をしていました。この広報誌も単純に支部の活動を告知するだけではなくて、様々な日本紹介も行っているなど、クオリティーが高く、日系企業からの広告収入を得るほどに評判が高かったものです。（現在は新編集長になっていますが、脈々と引き継がれています。）

日本とアメリカをつなぐ人々

このように、ステイーヴンさんが立ち上げ、順調に機能しているJet Witで活躍されている人を紹介したいと思います。Jet Wit上で日本の時事問題や流行などを紹介しているWit Lifeというコーナーを連載しているス

テシー・スミスさんです。ステシーさんは二〇〇〇年から二〇〇三年まで熊本県でCIRをしていました。現在はフリーランスで通訳・翻訳・ライターの三つの仕事をこなしています。より具体的な中身については、彼女のウエブサイトをご覧くださいだけだと思います。

<http://stacysmith.webs.com/servicesjapan-eschn>

次頁の写真が彼女の活躍ぶりを如実に語っているのですが、左端がステシーさん、中央がニューヨーク大使夫人、右があのある有名なZAGAT発行人の方になっています。ニューヨーク大使公邸で行われた和食紹介イベントで、高名なお二人の通訳を務めています。私も何度か彼女とお話させていただきました。私ごとがありますが、こうしたハイレベルな通訳をこなせるという彼女の能力には脱帽しきりといった感じでした。

さらに、ステシーさんは自身の高い能力を活かして、様々な日本関係の仕事をしています。二〇〇八年夏にニューヨーク市で上演された、俳優座の田野聖子さんの演劇「花いちもんめ」の英語字幕を担当したり、ニューヨーク市で広く配布されている、日本の食や文化を紹介したりするフリーペーパー「Chopsticks」のスタッフライターなども務めています。

こうした彼女の様々な活動の中で、特筆すべきは、米国内務省のインタナショナル・ビジター・リーダーシッププログラムの

専属通訳者であるということですが。このプログラムは米国国務省が、米国と他の国々との間の相互理解を構築することを目指した交流事業です。外国の様々な分野の方々（政治家・大学教授・弁護士・自営業など）に対して、それぞれの専門性に合ったプログラムを組みます。参加者は三週間ほど通訳者と一緒にアメリカを横断しながら、自分の専門知識を深め、かつアメリカの多様性を経験できるように、たくさんの方と触れ合う機会を与えてもらっています。

ウェブのさらなる活用



↑ニューヨーク大使公邸の和食紹介イベントで通訳を務めるステシーさん

ウェブの世界では、ブログ以外にもツイッターやフェイスブックなどのSNSツールが幅を効かせています。JETAAの多くの支部もこれらのSNSを活用して組織の維持や会員のリクルートに活用しています。同窓会レベルだけではなく、個人レベルでもLinkedInというビジネス向けのSNSなどを活用してネットワークを広げる動きもあります。

帰国予定のJETの皆さん、帰られる場所のJETAAの情報をJet Witなどで調べて、ぜひ同窓会に入会してください！ネットワークが広がって、「JETプログラムに参加してよかった」と思うこと間違いなしです！

最後に

JETプログラムに参加して、日本での生活を経験し、好きになった日本についてはその故郷を自分のコミュニティに紹介したい。今回はニューヨーク市で活躍しているJET経験者の紹介だけになってしまいましたが、世界中でJET経験者は似たような思いを抱いてそれぞれの仕事なり生活なりを送っているはず。彼らの多くは日本の故郷が好きだし、好きだからこそJETAAのような同窓会に参加したり、日本に関わることを生涯の生業にしたりする人もいます。帰国後の彼らに連絡を取ってみると、思っていた以上に膨らむとともに、何らかのビジネス

チャンスが転がっているかもしれません。一度ならず二度も美味しいJETプログラムを活用しない手はありません。

参考：ここで紹介したウェブサイト一覧

| | |
|-----------------------|---|
| Jet Wit | http://jetwit.com/wordpress/ |
| ステシーさんのページ | http://stacysmith.webs.com/servicesjapanese.htm |
| JETAA ニューヨーク支部 | http://jetaany.org/ |
| JETAA アメリカ (Twitter) | http://twitter.com/JETAAUSA |
| JETAA アメリカ (LinkedIn) | http://www.linkedin.com/groups?gid=92448&trk=hb_side_g |

生きている歴史に 触れる！



香川県国際課国際交流員
Christopher McCabe
クリストファー・マッケープ

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。」という有名な書き出しで、源平合戦と平家の栄華と没落を描いた「平家物語」が始まります。私は大学時代、日本語を専攻し、平安時代後期から鎌倉時代にかけて起った源平合戦を勉強するためにこの傑作を読み、源氏と平家の勇ましい戦いが語られたこの話に引き込まれました。その中で特に印象に残ったのは、源氏の無比な射手の那須与一の話でした。

物語によると、その日の戦いが終わる前に、屋島の沖に逃げていた平家の船では、年若い美女が竿の先に扇をはさみ、陸の源氏に向かって手招きします。与一が馬を海に乗り入れ、渾身の力で七〇メートル以上離れた船とともにゆれているのに一発で命中させます。源平両軍は見事な技に歓声を上げます。この話が印象に残るのは、平家と源氏は敵同士なのに、与一の偉業に感嘆し、皆が一瞬ひとこになることでした。

それは一八五年の話ですが、私の香川県における国際交流員としての活動と直接の関係があります。紅葉が残る昨年十一月末に、「第四回外国人のための四国八十八箇所遍路体験」というイベントで、県内在住ALITや特別に招待したケニヤ大使館員などを含めて七カ国から集まった一五名

の「お遍路さん」と一緒に屋島寺と八栗寺を結び遍路道を歩きました。この事業は、二〇〇八年四月から香川県国際課が実施しており、香川県在住外国人に県内の霊場札所を歩いてもらい、その素晴らしさを体験したうえで、感想などを書いてもらい、ブログに掲載し、対外的に情報発信することにより世界遺産登録の一助となることを目指しています。私は第一回にALITとして参加し、第二回からは国際交流員としてイベントの企画、通訳、案内などに取り組んでいます。これまでは、県内の美しい二の札所のうち、十三箇所を訪ねてきました。第四回の遍路歩きは、これまでで一番歴史を感じた体験でした。私たち「お遍路さん」は屋島の麓から「白衣」(びやくえい)と「輪袈裟」(わげさ)という装束を身につけ、「菅笠」(すががさ)をかぶり、「金剛杖」(こんごうじょう)をしっかりと持ちながら、頂上の屋島寺まで急な坂道を登りました。そこで参拝の仕方を学び、本堂の前では巡礼中のお遍路さんがお経を唱えるのを聴き、千



↑お遍路さんに欠かせない白衣と菅笠
(撮影者: Reese Mankenberg)

年以上息づく遍路文化に触れました。

お遍路の歴史・文化は私が勤めている香川県と特別な関係があります。四国八十八箇所は、四国の四つの県を巡る巡礼ですが、香川県は弘法大師空海の出生地として有名です。私は大学時代に日本の宗教を勉強した時、真言宗の開祖である空海が一〇世紀に修行した四国内のお寺が巡礼の霊場札所になったということを知りました。しかし実際に境内で参拝して自然が溢れる遍路道を歩いてみると、巡礼の真髓が分かります。昔は第一番札所の霊山寺(徳島県)から、第八八番札所の大窪寺(香川県)までずっと歩いて巡礼する遍路は、途中で死ぬことを覚悟し、倒れたら金剛杖が卒塔婆になったといわれています。金剛杖に記されている「同行二人」(どつぎようににん)という文字の通り、お遍路さんが空海と一緒に道を歩き、空海の知恵を授かりながら心を清めることができますともいわれます。私も遍路道を歩いてみて、この信仰心が分かりました。



↑もみじの下を歩く遍路体験の参加者

「こういうことを考えながら屋島寺の境内

を離れ、紅葉の下を歩きました。屋島の中腹のあたりで木立から出たら、屋島の台地と八栗寺がある五剣山の間の盆地と浜辺が目の前にパッと見えてきました。那須与一がまだ海の中で弓を構えているかのようでした。あの扇のように紅いもみじの葉っぱがひらひらと落ちてきました。その一瞬に、「また生きている歴史に触れているんだなあ」と思いました。

その日が終わらないうち、もう一度香川県の歴史と触れることになりました。次の八栗寺で、甘酒の「お接待」(遍路に対するおもてなし)を受け、副住職からお寺の名前の由来の説明をいただきました。「那須与一が弓矢を放った三〇〇年以上前に、空海は中国に渡って仏教を勉強する前に、五剣山で遣唐使が成功するかどうかを占って見たそうです。八つの焼いた栗を手に『芽を出して成長するなら成功するということだ』と空海は宣言しました。空海が波の激しい海を渡り、中国での勉強を無事終えてから八栗に帰ってみると、奇跡が起こりその焼いた栗が芽を出していました。そこから『八栗寺』と名づけられ、空海は真言密教をもたらしました」と副住職は語りました。

八栗寺の参拝が終わり、瀬戸内海を臨む屋島と五剣山の二つの札所から、家路につきました。屋島寺と八栗寺。那須与一と弘法大師空海。生きている歴史と文化を現地で学ぶということの貴重さが分かりまし



↑那須与一をデザインした高松市のマンホール

た。仕事というよりも歴史の学習として、国際交流員というよりも生徒だと感じ、こういう風に生涯学習が続いていけばいいなあと思うようになりました。その日の最後に車から降りて地面を見ると、それまで気づかなかったことに気づきとても驚きました。我が家がある高松市のマンホールには那須与一の絵が描かれていたのです。「こころでも歴史は生きている」と思いました。



Christopher McCabe

アメリカのコロラド州出身。コロラド大学で4年間日本語を勉強し、関西外国語大学に1年間留学。2006年から四国の香川県でALTとして2年間勤務し、その後CIRとして2年目。趣味は俳句、登山。好物は讃岐うどん。

三本の矢



富山県立八尾高等学校外国語指導助手
Tiffany-Lee Dyer
ティファニー・リー・ダイアー

私が初めてJETプログラムに応募したとき、私の大学の日本語の先生は当然、私がどこに配属を希望しているのか知りたがりました。まあ……私のオタクという評判のせいでしょうが、彼は私が東京のような大都市を希望しているのかと聞きました。「いいえ。」私は答えました「田舎に行きたいんです。」

彼は驚いた顔で、なぜ東京のように明かりに満ち、サブカルチャーやもろもろのアニメに関連するものにあふれる魅力に満ちたところではなく、小さな田舎町を希望するのかと聞きました。

そのとき私が先生に返したのは、ごく標準的な返答だったと今でも思います。私は「大都市ではなく典型的な日本の町がどのようなものかを知りたいのです。」と説明しました。同時に「英語を知らない人達が多いところに行きたいのです。」とも。自分が田舎に何を期待しているのかは基本的に理解していたつもりですが、この小さな日本の田舎町でこのことがこれほど多くのことを私に与えてくれようとは、そのときの私には想像も出来ませんでした。

二〇〇六年八月、私は山に近い八尾町の、小さいけれど居心地の良いアパートに落ち着きました。八尾は富山県にある小さな町です。「おわら風の盆」という伝統的なお祭りで全国的に有名な町でもあります。八尾は私が今まで見た中で特に小さな町、という訳ではありませんでしたが、都市文化

の中心でも決してありません。友人が親切に言ってくれた言葉は「本当に田舎、って訳じゃないけれど、でもそれに近いかも。」



↑体育大会では郷土芸能部を始め、全校生徒がおわら風の盆を踊ります

この八尾町に来るまで、私は常に少なくとも都会と何か呼べるだけのところに住んでいました。そこでは暮らしてもつと便利で慌ただしいものでした。私はここに着くなり地域に溶け込み、人々と仲良くなれるだろうと思っていました。しかし、隣近所がすべて家族や知り合いか目上の人であるような町では、それは考えていたほどたやすくはないのだとすぐに実感することになったのです。

最初の一か月はゆっくりと過ぎていきました。しかし、いったん学校が活発に動き出すと、この田舎町で働くことが私にとっていかに幸運だったかが分かってきました。この高校の生徒達は地域社会に深く関わり、愛着を持っています。それはおそらく彼らが小さな町で育ったために地域社会の大切さを理解し、認めているからでしょう。この学校には活発なボランティア部があり、部員達は老人ホームやデイケアセンターへ不定期にボランティアに出かけ、リサイクルや環境保護のためのプロジェクトにも関わっています。しかし、ボランティ

ア部の活動範囲は八尾町だけにとどまりません。世界の問題を知ることにも熱心で、募金活動をすることもあります。最近では壊滅的打撃を受けたハイチ地震に対して募金活動を一生懸命行っていました。

生徒達は、私が地域社会や国際社会で一人一人が果たすべき役割を理解する手助けもしてくれました。私は母国アメリカでたくさんのボランティアに出会い、自分自身も日本に来る前はいくつものプロジェクトに関わってきました。しかし、ボランティアア部が社会問題にアプローチするときの一貫した情熱や、活動に関わるスタッフや友人から彼らが受けるたくさんの支援は素晴らしいの一言に尽きました。私の好きな言葉に、"the whole is greater than the sum of its parts." というものがあります。日本語でも同じような言い回しがあると知りました。「三本の矢」とは「一本の矢はぼきりと折れてしまうが、三本揃えればなかなか折れることはない」という意味です。ボランティア部は、多数の個人ではなくひとつの調和のとれたグループとして地域社会をまとめ、また違いを生み出すためその社会を正しい方向に向けることでこの言葉を実践しています。



↑郷土芸能部の生徒が踊る前に準備をしています

他にも私を感動させたのは八尾高校の郷土芸能部です。体育大会の日に部員

達は中央に演奏場と踊り用ステージを設け、一般生徒も一緒に踊る中で演技を披露します。さらに地元の風の盆まつりには夕方から夜明けまで踊りに加わります。伝統がこの地域には深く根つき、大切なものとなっているのです。

アメリカでは、小さな町の伝統や価値観に関心を持ったことは一度もありませんでした。便利さが一番であり、科学技術の成長や世界がより良く、より迅速に、より効率的になる方法にばかり関心がありました。しかし、そのどれもがここ八尾の何世紀にもわたる歴史を持つおわら踊りにはかなわないものでした。私は尊敬の気持ちで伝統の美しさを見つめ、そこからたくさんこのことを学びました。そして生徒達が練習に励み祭りに参加する姿を見て、私は自分が何か自分自身を越えた大きなものの一部份になっているという確固たる気持ちになりました。

私はどこに住もうともいつも「これじゃ足りない、もっと大きなもの、もっと良いもの、もっとたくさんのものを」と言い続ける種類の人間でした。"more" がこれほど多くのものを指すのだとは思っていませんでした。実際私にはそんなに多くのものが必要ではなかったし、私の人生に意味をもたらしてくれる場所にいる必要もなかったのです。私にとって田舎に住むことは、私の目の前の何が正しいかをいろんな点で教えてくれることとなりました。確かに今

でも私は面白いゲームに夢中になったり、アニメを見たり漫画を読んだりして楽しんでいきます。しかし、そのことが本当の日本ではないとも思っています。この八尾町の生徒や先生達は、地域社会とつながりを持っては人生はもっと楽しくなるということ、そしてそうすることで自分を取り巻くすべてのものやすべての人たちの美しさや価値が分かってくるということに私に教えてくれました。



↑近所の子供たちが八尾高校へ伝統的な獅子舞をするために来ました



Tiffany-Lee Dyer

アメリカ・メイン州ポートランド出身。ペンシルベニア州のラファイエット大学で心理学を専攻して、ここで2年間日本語を勉強しました。2006年に、JETプログラムで日本へ来て、4年間ずっと富山県の八尾町に住んでいます。八尾高校と富山商業高校でALTとして勤め、そして去年からJET PAとして働いています。JETプログラムを経て、日本語の勉強を続け、日本と関係のある仕事をするとつもりです。趣味はギターを弾くことや、ゲームセンターへ行くこと料理をすることです。

Experiencing Living History on the Job!

“The sound of the *Gion Shōja* bells echoes the impermanence of all things; the color of the *sāla* flowers reveals the truth that the prosperous must decline. The proud do not endure, they are like a dream on a spring night; the mighty fall at last, they are as dust before the wind.”* Thus, famously begins the *Tale of the Heike*, which chronicles the Genpei War and the rise and fall of the Heike Clan. While majoring in Japanese in college, I read this literary masterpiece during my studies of the history of the Genpei War, which occurred from the end of the Heian Period until the beginning of the Kamakura Period, and I was fascinated by the tales of the heroic struggle between the Genji and the Heike soldiers. Among those, the one that struck the deepest chord with me was that of Nasu no Yoichi, the peerless Genji Clan archer.

According to the tale, just before the end of the famous Battle of Yashima, a beautiful young girl on a boat of the fleeing Heike armada raised a folding fan upon the tip of a spear and dared the Genji soldiers on the shore to shoot it down. Yoichi rode his horse into the ocean, and with incredible strength shot the arrow more than 70 meters into the dead center of the fan, as it swayed along with the rocking boat. At this beautiful display of archery, the soldiers from both sides sent up a shout of praise, and this is what touched me the most: the Heike and Genji, though enemies, momentarily came together as one to celebrate Yoichi’s marvelous feat.

This is a tale from the year 1185, but it happens to have relevance to my activities as a Coordinator for International Relations here in present day Kagawa Prefecture. In late November of last year, while signs still remained of the autumn’s red leaves, I walked the road connecting the temples of Yashimaji and Yakuriji with a group of 15 “pilgrims” (including

ALTs from Kagawa and even a member of the Kenyan Embassy), who had assembled from 7 different countries for the “4th Shikoku 88 Temple Pilgrimage Experience for Foreign Residents and Visitors.” This project has been conducted by the Kagawa Prefecture International Affairs Division, since April of 2008. Its objective is to make a contribution toward getting Shikoku’s 88 Temple Pilgrimage Circuit registered as a UNESCO World Heritage Site by having foreign residents and visitors walk and experience the remarkable Pilgrimage Trail. The participants write essays about their experience, and then we post their work on the internet to help publicize the campaign. I participated in the very first Pilgrimage Experience when I was an ALT, and from the 2nd Pilgrimage Experience on, I have been active as a CIR in planning the event, interpreting, and guiding our guest “pilgrims” around the temples. In the project’s two years, we have already visited 13 of Kagawa’s 22 beautiful temples.

The 4th Pilgrimage Experience was by far the one in which I most deeply felt the historical significance of the places we visited. With our pilgrim’s *byakue* white vests, *wagesa* sashes, *sugegasa* straw hats, and *kongōzue* walking staffs, we all climbed the steep ascent from the foot of Yashima Plateau to the temple at the top. There we learned the proper etiquette for visiting a temple, we listened to other pilgrims reciting their sutra chants, and we fully experienced the Pilgrimage culture, which has been alive for over 1000 years.

The history and culture of the Pilgrimage is especially important here in Kagawa. The Pilgrimage winds its way around all four prefectures in Shikoku, but Kagawa is the birthplace of Kōbō Daishi Kūkai. He is another figure about whom I had studied in college, where I discovered that he

Three Arrows

When I first applied to the JET Programme, my Japanese teacher at university was naturally curious about where I would like to be placed. Given my reputation for being an *otaku*, he asked if I hoped to be placed in a big city like Tokyo.

“No,” I replied. “I want to live in the *inaka*!”

He looked at me with astonishment, and asked me why I would choose life in a small, rural town over the typically desired allure of Tokyo, with its lights, sub-cultures and plethora of anime paraphernalia.

At the time, I gave him what I now feel to be a standard answer. I explained to him that I wanted to learn what it is like in a typical Japanese town, not just what it is like in the big cities. I also explained that I wanted to go to a place where people were not likely to know English. I had a basic idea of what I was looking for in the *inaka*, but what I didn’t know at the time was how much more than this my little town in rural Japan was about to give me.

In August 2006, I moved into my cozy little apartment in the mountainous village of Yatsuo, Japan. Yatsuo is a small town in Toyama Prefecture. It is nationally famous for a traditional dance called the *Owara*

Kaze no Bon. Yatsuo is not by any means the smallest town I have seen in Japan, but it’s definitely an urban center, either.

Before moving to this town, I had always lived in at least somewhat urban areas, where life was more convenient and faster-paced. I had expected to get out in the community and make friends immediately upon arrival, but I soon realized that in a town where your neighbors are all families or elderly, it’s easier said than done.

The first month passed slowly, but once school got in full swing, it started to dawn on me how truly lucky I was to be working in a rural town. I noticed that the students at this school are deeply caring and involved with the community. I think it’s because they have come to see and appreciate how important community is by growing up in a small town. This school has an active volunteer club whose members help out at nursing homes and day care centers, and engage in other community projects, such as recycling and environmental protection. However, the volunteer club’s reach is not limited to just Yatsuo. These students also endeavor to encourage global awareness, and in addition to spreading information, they have raised money for current issues, the most recent being the devastating earthquake in Haiti.

Christopher McCabe

was the founder of the Shingon Sect of Buddhism and that the places in Shikoku at which he had practiced his ascetic monk's studies eventually became the holy temples of the Pilgrimage Circuit. However, I found that, until I had actually bowed my head in prayer in the temple sanctuaries and walked along the trail, I hadn't fully understood the essence of the Pilgrimage. Long ago, the pilgrims who walked the circuit on foot from the first temple (Ryōzenji in Tokushima) on through the eighty-eighth and last temple (Okuboji in Kagawa), were prepared to die as they walked the trail – if they were to fall as they journeyed along, they would be buried on the spot and their *kongōzue* would become their grave markers. On those walking staffs is the inscription, “Dōgyō Ninin,” which means “to walk together with Kūkai,” for his wisdom comes to you and your heart is purified as you walk the trail. Once I had actually experienced being a pilgrim, I came to understand the true beauty of this belief.

Thoughts along these lines were in all of our heads as we left Yashimaji on that day to walk beneath the autumn leaves. Then, as we came out of the trees in the middle of the mountain's downward trail, there appeared before us that famous beach of which I had learned during my studies. I felt as if I could actually see Nasu no Yoichi riding out into the water with his bow pulled taut. The red maple leaves fell from the trees, fluttering around us like the fan falling from the Heike boat. In that moment I thought, “Here again is living history!”

But that wasn't to be the last encounter with the history of Kagawa Prefecture that day. At the next temple, Yakuriji, the assistant head priest provided us with the *o-settai* (courtesy offered to pilgrims on the trail) of some warm *amazake* (a thick and sweet kind of Japanese sake) and a lively explanation of the origin of the temple's name. He explained, “300

years before Nasu no Yoichi shot his famous arrow, Kūkai came to this mountain, Gokenzan, to foretell whether or not his upcoming journey to China and his continuing pursuit of Buddhist studies there would be successful. Kūkai took eight fire-roasted chestnuts in hand and said, ‘If I plant these in the ground and they bear fruit once more, it is a sign that my journey shall be a successful one!’ Kūkai then crossed the dangerous and violent sea, completed his studies in China, and returned to this place to find that all eight fire-roasted chestnuts had miraculously sprouted again. From there, this temple's name became ‘Yakuri’ (which means eight chestnuts), and Kūkai went on to establish the Shingon Esoteric Sect.”

When our visit to Yakuriji concluded, we left Gokenzan Mountain and Yashima Plateau, both facing out toward the Seto Inland Sea, and headed for home. Yashimaji and Yakuriji. Nasu no Yoichi and Kōbō Daishi Kūkai. From this experience on the job, I truly learned the importance of studying living history at the very place in which it was made. I began to think that my job is more than a job – it is a classroom; I am not so much a CIR as a student of history. If I could manage to keep learning throughout my whole life like this, that would be a terrific thing, indeed. As I thought this, we finally arrived back in town. As I got out of the car, I happened to look down, and caught my breath in surprise. For the first time, I realized that the manhole covers in my city, Takamatsu, were decorated with the scene of Nasu no Yoichi drawing his arrow. And I thought, “History is alive even here!”

*Trans. McCullough, Helen Craig. (1988). *The Tale of the Heike*. Stanford: Stanford University Press.

英語

Tiffany-Lee Dyer

These students have helped me appreciate each person's role in the local and global community. I met plenty of volunteers in my home country, and have volunteered for several projects myself before coming to Japan. However, the consistent passion with which the volunteer club approaches issues, and the overwhelming support they receive from staff and peers, is nothing less than remarkable. One of my favorite phrases is “the whole is greater than the sum of its parts.” I learned that the Japanese have a similar phrase: *Sanbon no Ya*, which translates directly into “three arrows [are stronger than one]”. I feel that the volunteer club embodies this phrase by pulling the community together and pointing it in the right direction to make a difference not as a number of individuals, but as one coordinated group.

Something else which really struck me was Yatsuo's traditional culture club, in which students study *Owara Kaze no Bon*. On Sports Day, members of this club take center stage and dance while the rest of the school performs around them. Additionally, these students dance at the festival from dusk until dawn. Tradition is deeply important to this community and it shows.

Back in the United States, I never really cared about small-town traditions or values. I cared about convenience. I cared about growing

trends in technology, ways the world was becoming better, faster, more efficient. But here, none of those things matter to me nearly as much as this centuries-old dance. I learned a lot about traditional beauty just from watching the reverence associated with it, and when I watch my students practice and attend the festival, I feel a deep-rooted sense that I am part of something bigger than just myself.

I was always one of those people who said, regardless of where I was, “this is too small for me! I want something bigger, I want something better, I want more!” I didn't realize at the time that “more” could mean so many things, and I didn't have to be in a place that had a lot of stuff, to be in a place that brought meaning to my life. For me, living in the *inaka* has forced me in many ways to value what is right in front of me. Sure, I still enjoy losing myself in a good game, watching anime or reading manga, but that's not what Japan is really about. What my students and teachers in this town have taught me is that life is far more enjoyable if you connect to your community, and by doing so find the beauty and worth in everything and everyone around you.

英語